

いま求められる施設「すとっく」

調布市知的障害者援護施設ワークライフカレッジ「すとっく」が昨年4月に開所されました。それからほぼ1年が経った4月25日、施設の取り組みについてお話を伺いました。

「すとっく」は、主に知的障害のある18歳以上で市の受給者証を持つ方が対象の施設です。市からの委託を受けて調布市社会福祉事業団が運営しています。

一人ひとりのペースに寄り添った支援をするため、

・**生活訓練（2年間）**：まずは生活リズムを整えることから始め、利用者が自分の「やりたいこと」を見つけ、新たな挑戦をするための期間。

・**就労移行支援（2年間）**：軽作業などを通じて実践的な職業スキルを学び、具体的な就労を目指す期間。

これらのプログラムを通じて最長4年間の学びの機会を提供し、利用者の自立をサポートします。さらに、就労後も3年間をめどに丁寧な支援を行っています。

これまで、なかなか就労できないとか、家にもってしまおうか、社会に出て生きづらさを抱えてきた若者たちにとって、安心して過ごせる居場所になり学び直しができる施設は重要です。

見学を終えて、知的障害だけでなく様々な理由で生きづらさを抱え社会に出られない若者が増えている昨今、こうした施設がもっと必要だと感じました。（S.Y）



調布の里山歩き報告

調布市に里山があることをご存じですか？

新緑が目に見え鮮やかな5月の日曜日、6名の参加で深大寺・佐須地域を巡る里山歩きを実施しました。

深大寺・佐須地域南農業公園

今回のハイライトは、2024年7月に本格オープンした、柏野小学校の斜め裏手にある深大寺・佐須地域南農業公園でした。地域のつながり作りを目的に活動するグッドコモンズが運営を委託されており、この日は親子連れや大人たちがオクラや里芋の植え付けなどの農作業をしていました。ここで収穫した野菜は、子ども食堂や、公園内のかまどベンチを使ったピザづくりなどのイベントで活用されているそうです。広場でレールを組み立ててミニカーで遊んだり、虫を捕まえたりする子どもたちや、おしゃべりを楽しむ大人たちの姿も見られ、農業体験だけでなく、気軽に立ち寄って子どもも大人も楽しめる場になっていました。

その後は、この日生ごみコンポストの講習会が開かれていた深大寺自然広場近くの民間の農業イベントスペース、カニ山の上の北農業公園、そして湧き水の佐須用水が流れる農地などを巡りました。

里山の景観を残していくためには

調布の里山は、野菜や多様な生き物を育むだけでなく、人との触れ合いが生まれ、自然が心を元気にしてくれる大事な場所だと改めて知る機会になりました。この貴重な里山を未来の子どもたちに手渡すためには、私たち市民や行政、そして農家の方々が手を取り合って、この里山を守っていくことが大切だと心から感じた一日でした。（D.K）



深大寺佐須地域南農業公園

活動報告

市議会

- 4/10 議員研修「議員のコンプライアンスについて」
- 5/10 木島平村・調布市盟約40周年姉妹都市交流
- 5/15 災害時安否状況等確認訓練および被害状況の報告訓練（オンライン会議）
- 5/17 第20回議会報告会
- 5/30～6/18 第二回定例会



議員活動

- 4/7 三小入学式・4/8 八中入学式
- 4/12・5/18 おしゃべりカフェ（議会報告・深大寺佐須の里山あるき）
- 4/13 映画『ルマル17歳。わたしたちはADHD』鑑賞（市川房枝記念会女性と政治センターにて）
- 4/23 介護支援専門員調布連絡協議会主催研修会「次世代のケアマネジメントとケアマネジャーのあり方」（高室成幸氏）
- 4/25 調布ネット ワークライフカレッジすとっく・デイセンターまなびや国領視察
- 4/26 調布中避難所開設訓練に参加
- 5/14 第5回教育委員会定例会傍聴・調布駅前トイレ内覧
- 5/17 総合水防訓練

ワークライフカレッジすとっく・
デイセンターまなびや国領視察▶



- 6/8 調布市歯科医師会主催「歯と健康のつどい」
- 6/15 たづくりまつり『ゆめパのじかん』鑑賞
- 6/16 子ども子育て会議傍聴
- 6/17 第6回教育委員会定例会傍聴
数名の議員仲間と議会基本条例や規則などについての勉強会を継続しています。



鑑賞した映画より～

▶『ルマル17歳。わたしたちはADHD』

ADHDの特性のある女子高校生2人を描いた映画です。家族との衝突や友人の冷たい態度に傷つきながら、自分の存在を肯定的に捉えようと励まし合い、自立を目指します。見た目では分からないADHDの特性が「障がい」となる要因が周囲の環境にあることに気づかされます。

▶『ゆめパのじかん』

日本で初めて子どもの権利条例をつかった川崎市にある夢パークの子どもたちを描いた映画です。学校に行かなくなった子どもたちが生き生きと過ごす姿や、自分の言葉で語る学校への思いが印象的でした。

